平成３０年度「アクティブ・ラーニング推進事業」

田原市の取組について

１　はじめに

本市では、全国学力・学習状況調査の結果を受けて、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指し、主体的・対話的で深い学びを意識した学習過程の改善に取り組んでいる。子供が主体的に活動するためには、「やりたい」「やらなければいけない」という意欲を高め、見通しをもって考え実行する実践力を身に付けることが必要である。また、自己の振り返りや他者との関わりの中で、自分の成長を実感し、価値付けていくことも大切である。そこで、子供が「分かる」「できる」を実感する授業を構築し、具体的な教師支援の研究を進めていく。研究推進校の取組をもとに、各小中学校の現職研修を中心に実践研究を進め、互いに意見交流をすることで、学習過程の質的な改善を目指す。

２　活動内容

（１）研究推進校を設定（田原市立衣笠小学校）し、教育委員会指導主事と推進校の教員、市内小中学校教務主任による研究推進委員会を組織する。

（２）研究推進校に外部講師を招き、授業研究や公開授業研究会を開催する。

（３）研究推進校は、研究推進委員会を中心に以下のように授業実践を行うとともに、研究授業・協議会を開催し、研究についての指導・助言を頂くとともに、研究の成果を還流する。

①　研究主題（田原市立衣笠小学校）

気づき、動き、笑顔で自らの行動を広げていくことができる子

～住んでいる地域に愛着や誇りがもてる取組から～

②　目指す子供像

衣笠大好き、田原大好きな子供たち

③　ねらい

地域に愛着や誇りがもてる授業実践や諸行事に取り組むことを通して、自ら感じたことをもとに、周囲のことを考えて行動できる子供たちへと導き、衣笠大好き、田原大好きな子供たちを育てる。

④　研究の仮説と手だて

<u>仮説</u>

子供たちの興味を高めるような地域を巻き込んだ取組を進めていけば、自ら地域の人たちと関わりをもち、ふるさと田原が大好きな子供たちが育つであろう。

手だて

① 子供たちが地域社会と関わる取組をする。

② 地域の教育力（ひと・もの・こと）を有効活用する。

③ 何をしたら良いのか、見通しをもつことができるように対話する。

④ 「衣(きぬ)わタイム」を実施し、子供同士の相互理解を図る。

（衣わタイムとは、衣笠小のソーシャルスキルトレーニング　以下「ＳＳＴ」）

※　研究の成果は、市内の校務支援システムを活用し、情報を共有できるようにするとともに、田原市のホームページに掲載していく。また、県義務教育課の Web ページにて公開する。

※　リーフレットにまとめて配付し、共有、活用できるようにする。

３　事業概要

（１）研究推進校の取組

①　衣わタイム（ＳＳＴ）研修会

７月１８日には、「より良い授業づくりを支える人間関係づくりの理論と具体方策」について学ぶ機会をもった。子供が楽しいと感じているならばの価値があること、関わりに安心感がなければ子供は友達と関わらないことなどを確認・共有した。教師の心構えや支援として、発達段階に応じて価値付けの言葉がけをすること、相手への関心がもてるようにすることなど、普段から実践していくことが大切である。さらには、先進校の実践に学ぶことでより効果的に取り組むことができ、ソーシャルスキルや自尊感情の意義を感じる活動をしていく。

②　外部講師による指導・講演会

１０月２５日には、教育研究家、学校マネジメントコンサルタント、文部科学省学校業務改善アドバイザーの妹尾昌俊先生を招いて、「地域とともにある学校づくり」について学んだ。地域との連携をなぜ進めるのか、どう広げるのかを考える機会となった。実際に、子供が仲間と関わりながら、主体的に活動している姿を見ていただき、地域連携の大切さを価値付けていただくとともに、大変さについて見直した。地域連携での教育を続けるためには、事前の打合せ等で時間がかかるが、それでも子供にとって大きな成長が見られることが再確認された。今後どのような教育改革が行われるのか、今の子供にどのような力（資質・能力）を伸ばしたいのかという問題が提起された。

（２）教務主任を中心とした各学校での取組

①　授業改善の計画報告

９月には、各学校において、平成３０年度全国学力・学習状況調査結果の分析も加え、２学期の授業改善計画が作成された。

・課題（問題）解決力を高めるために、地域社会の問題について探究的な学習を展開する。
・子供が見通しをもてるように、予想・追究（考察）・結論と考えを整理して取り組む、学習の目標と過程を明確にする。
・考察する力を強化するために、キーワードの提示、考察内容の比較検討などをする。
・検討、体験、説明などの活動を伴う学習を心がける。ペア・グループで教え合う、全員での操作活動など。
・発達段階に応じた話形を示し、話合い活動の充実を図る。
・どうしてそう考えたのか根拠が明確になるように対話する。
・書く・話すなどのアウトプットの機会を増やす。
・振り返りの充実のために、視点を与える、時間の確保などをする。
・自分の考えをまとめる活動を各教科で取り入れる。言葉でまとめる、資料を活用するなど、まとめ方の工夫についても考えられるようにする。

課題（問題）解決力、見通し、比較・検討、話合い、対話、まとめ、振り返り、アウトプット、操作活動など、多くのキーワードが出された。これらをまとめて各学校へ示し、互いのアイデアを参考にしながら授業改善に取り組めるようにした。また、授業改善の成果として、授業者の変容を確認するようにお願いした。

②　授業改善の実施

各学校において、上記の計画に基づいて、授業改善についての取組が行われた。各授業者の具体例の一部を下記に示す。

・面積の学習において、博士の研究所を造るというストーリーで単元を進めた。
・実際に１０００枚以上の紙を用意し、友達と協力しておよその枚数の求め方を考える授業をした。
・前時の振り返りを生かして次時の導入をし、子供の思考の流れを大切にした授業展開をした。
・毎回、めあてに対する振り返りをするように指示をして単元を進めた。
・学級新聞作り、お世話になった地域の人へのお礼の手紙など、学んだことをまとめたり、思いを伝えたりする場面を設定した。
・２行日記、授業の感想、読書感想カードなど、書く場面を意識的に増やした。
・朝のスピーチ、根拠（理由）を問う、話合いなど、考えて話す場面を意識的に増やした。

・子供が考え、話し合ってから活動するようにした。
・子供同士で教え合い、話合い、まとめる時間を十分にとった。
・子供が必要感をもつために、生活と関わって考えられるように課題を設定した。
・「できる」「分かる」授業をし、ほめる場面を増やした。
・言葉で考え方（解き方）を書くようにした。
・学習に関する本を用意し、調べ学習が充実するようにした。
・ＩＣＴ、実物、絵や写真などの活用をし、視覚的に捉えやすいようにした。
・書いた文章を子供同士で評価し合う活動を取り入れた。

自校の計画だけでなく、他校の良いアイデアを取り入れて実践した学校が多かった。各授業者が授業改善を意識して取り組み、教務主任を中心に評価できたことが良いと感じた。

４　事業成果

（１）研究推進校の取組の成果について

研究会当日、低学年は、身近な川や校区探検で発見したことを発表した。校区の自然や地域の人たちの良さに気付く子供の姿がたくさん見られた。中学年は、水鉄砲やどんぐりゴマの制作、ゴーヤの栽培・販売を行った。シニアや地域の方々との関わりは、子供が主体的に活動する良い機会となった。高学年は、地域防災や郷土の偉人「江崎巡査」の学習を行った。先輩の思いを引き継ぎ、自分たちの思いを伝える意識が高まった。特別支援学級では、収穫したサツマイモのスイーツを作った。地域の料理人との交流は、感謝の気持ちを芽生えさせた。記念講演では、教育研究家の妹尾昌俊氏に、地域とともにある学校づくりやふるさと学習、新しい学習指導要領が目指していることについて、衣笠小学校の取組にふれながら、地域の方と一緒に話を伺うことができた。

研究発表後も各学年で地域の教育力を活用した取組が続けられている。子供も先生方も、主体的に動き出しており、学校や地域、先生方や子供の意識が変化している。

１年生は、学芸会で「とべないホタル衣笠バージョン」を見事に演じ、校区の自然や地域の人のすばらしさに気づき、その思いを地域の方々に伝えることができた。２年生は、校区探検で見つけたことや驚いたことをクイズ形式で１年生に伝えた。子供たちの姿は真剣そのものであり、笑顔や笑いのある楽しい発表となった。３年生は、今もシニアとの活動を活発に行い、地域の方々と関わり続けている。秋には、バラ農家の訪問も行った。シニ

アの方々と七輪で焼き餅をしたり、鉛筆削りの体験をしたりする活動を行った。地域の人や友達と積極的に関わる子供が確実に育ってきている。４年生は、獣医さんを招いて「動物ふれあい教室」を１１月末に開催した。ウサギの飼育の仕方を学び、身近な生き物に対する愛着が増してきている。３学期には、大凧づくり、焼き芋・ウサギの引継ぎ、ステップトンネル等々、自分たちで動き出さなければならないことや地域の人と関わる活動に取り組んだ。５年生は、地域の陶芸クラブの方たちを招き、地元の花をいかす花瓶作りに取り組んだ。学校だけではできない貴重な経験を地域の方々とともにすることができた。防災学習も継続して行われており、子供だけでなく地域の人たちの防災意識を高める一助になっている。６年生は、学芸会で自分たちが考えた登場人物の思いを大切に、台本を手直しして伝統劇「江崎巡査物語」を熱演し、自分たちの思いを地域に伝えることができた。「戦争体験者の話を聞く会」も開かれ、地域の身近な人たちから戦争について学び、戦争について語り伝えていく必要性を感じ取っている。

手だてについて

①　地域社会と関わる取組

地域に関わる身近な体験や交流活動は、地域に愛着や誇りをもち、衣笠大好き、田原大好きな子供を育てる機会となった。子供が主体的に関わる様子から、今後も継続して取り組むことで、将来地域を愛する大人になっていくことが期待できる。

②　地域の教育力（人・もの・こと）の有効活用

地域の教育力を活用することにより、学校と地域双方でプラスの相乗効果をもたらし、子供たちも地域の人たちも元気になった。高齢化社会となっても、互恵性を感じて取り組むことができるので継続しやすい活動である。研究推進校では教育力の向上が進んでいるので、是非各学校でもその手法を取り入れて広げていただきたい。

③　見通しがもてる対話

子供が主体的に活動できるように、事前に具体的にどうすれば良いかを子供自身が見通しをもてるようにすることが必要だと分かった。意欲だけではすぐに活動できない、意欲が継続しないということにならないように、教師や友達が問い直すことが大切である。成功体験は、次なる意欲につながっていく。

④　衣わタイム（ＳＳＴ）の実施

直接判断することは難しいが、確かに子供同士の人間関係が良くなっていると担任たちは感じている。何をするにも、より良い人間関係の構築は必要不可欠である。どうすれば良いのかを日々トレーニングすることで、徐々に円滑になっている。今後とも、目的、意義を明確にして、取り組み続けていきたい。

（２）各学校の取組の成果について

１月には、２学期の実践をもとに、各学校より以下のように授業改善の成果報告があった。授業者の意識の変容を成果としてとらえることとした。

・授業者だけでなく参観者の授業に対する視点が鋭くなり、協議会の質が向上した。
・１時間の授業の中で、子供に付けさせたい力を意識して、授業をするようになった。
・子供の発言や振り返りから、子供の思考や意識を把握し、次の授業に生かすようになった。
・子供の発言に対して、本時のねらいに迫る適切な切り返しができるようになった。
・学習のめあてを意識して授業を進めたので、ポイントを絞ることができるようになった。
・具体を問う発問や対話を行うことで、子供の考えをはっきりさせることができた。
・具体物を用いて授業を行う楽しさを実感した。子供の意欲が引き出されるとよく分かった。
・話合い活動でグループ活動を取り入れて、多くの子供に対話的学びを促すことができた。
・「主体的・対話的な学び」を位置づけ、ねらいに沿った手だてを工夫するようになった。
・自分で考える時間、調べる時間を計画的にとり、子供がじっくり取り組めるようにした。
・話合いの目的を明確にして臨むようにした。
・授業で使う具体物の準備をすることで、教材研究が充実してきた。
・ていねいな授業計画をするようになり、効果的・能率的な授業を構想するようになった。
・ペアやグループなど、子供が考えを発表する場面を増やし、思考力・表現力の向上に努めた。

この取組が、教師の力量向上につながっているのは、授業において教師がより具体的で考えを深める発問が増えたことや、話合い活動やグループ活動など学び合いの機会が授業展開に多く盛り込まれるようになったことなどからも明らかであると言える。具体的な方法を各学校で出し合い、自分に取り込んで実践することが効果的であったと考えられる。今後も、教師の意欲と実践力を高めていく必要がある。

５　今後の事業計画

アクティブ・ラーニングというと、活動主体の授業となりやすい。その際、「活動あって学びなし」とならないように、教師も子供も目的を明確にして取り組むことが大切である。今回の取組で、子供に期待される変化が現れるためには十分な時間が必要であることがよく分かった。まずは授業者である先生たちの意識を変えていくことが重要である。授業をどのように考え、具体的に何をすれば良いのか、多くの先生方で出し合い、共有しつつ、実践していく。指導的立場の先生方が授業改善の方針を示し、先生方の取組の成果を評価していく地道な努力が必要である。子供の変容、成長はその先にある。

今後とも、各学校での取組の充実を図り、市内で共有しつつ、意欲と実践力をもって、目の前の子供のために全力で取り組むことができるようにしていきたい。

平成３０年度　田原市アクティブ・ラーニング推進事業

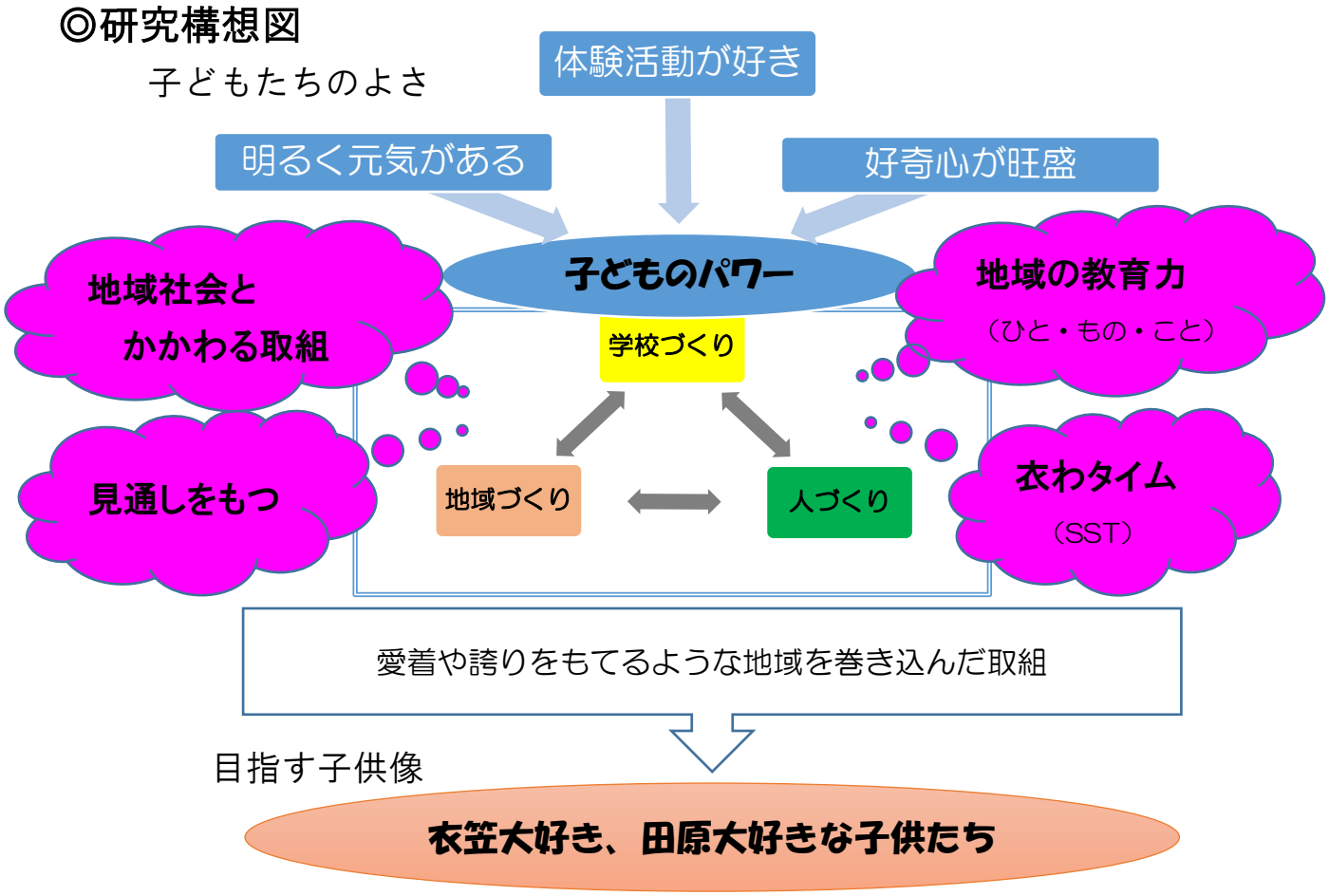
田原市立衣笠小学校（研究推進校）の取組

研究主題

気づき、動き、笑顔で自らの行動を広げていくことができる子

～住んでいる地域に愛着や誇りがもてる取組から～

◎研究構想図



研究のねらい

地域に愛着や誇りをもち、衣笠大好き、田原大好きな子供たちを育てる。

研究の仮説

子どもが興味をもつような地域を巻き込んだ取組を進めていけば、自ら地域の人たちとかかわりをもち、ふるさと田原が大好きな子供たちが育つであろう。

研究の手だて

① 子供たちが地域社会とかかわる取組をする。

② 地域の教育力（ひと・もの・こと）を有効活用する。

③ 何をしたらよいのか、見通しをもつことができるように対話する。

④ 衣わタイム（SST）を実施し、子供同士の相互理解を図る。

低学年部会　衣笠のよさを見つけよう

1年生　「秋見つけ」

いろいろな形のどんぐり、たくさん見つけたよ。

このどんぐりを使って、何がしたいかな。

シルバーのお年寄りに聞いてみよう。

（藤七原のKさん）
どんぐりでこまを作って遊ぶと楽しいよ。

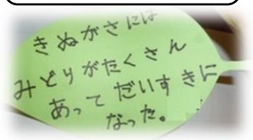
「だいすき　がっこう」

よく進むささ船は、どう作るのかなあ。

誰か知っている人が近くにいるかな。

まずは家の人に聞いてみよう。

この木に何か生き物がいるぞ。



2年生　「町たんけんに行こう！」

（地元のスーパーの店長さん）
これからも、いろいろなサービスや工夫をするよ。

パワーズでは、６０人もの人が働いているそうです。

（三河田原駅の駅員さん）
manacaを使ったことあるかな。

「きぬがさたんけんたいＩ」

（藤七原のTさん）
これがホタルのえさのカワニナだよ。

市民館長さんは、衣笠のことをよく知っているなあ。

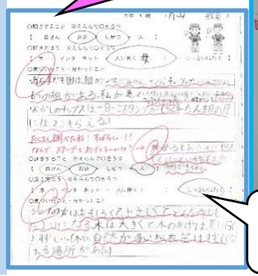
（衣笠市民館の館長さん）
衣笠市民館では、いろいろなことが行われているよ。

中学年部会　衣笠の人たちとかかわろう

3年生　「あるある“衣笠”たんけんたい」

衣笠のいい所をたくさん発見したよ。

どこに、どんないいところがあるのかな。



シニアの人たちがやさしかったです。

「地域の人とふれあおう！」

おじいさんに教えてもらえばいいんじゃない。

どこのおじいちゃん？

（八軒家のHkさん）
のこぎりの使い方が、なかなか上手じゃないか。

この水鉄砲は、こんなに遠くまで水が飛ぶぞ。

高学年部会　衣笠の人たちに自分たちの思いを伝えよう

5年生　「いざ出動！衣笠防災調査隊」

（市防災対策課のSrさん）
災害時に大切なことは〇〇です。

ぼくたちの避難場所はここだね。

防災手ぬぐいが完成したぞ。

「地震から身を守ろう～ぼくら衣笠調査隊～」

（市防災対策課のWさん）
南海トラフ地震が起こる確率は、８０％と言われています。

この塀はひびが入っていて危険だよ。

危険個所が３６箇所ありました。

6年生

「渥美線電車機銃掃射の悲劇」

田原の戦争のことを知っている人に話

どうやってお願いしようかな。

（機銃掃射事件を知るKmさん）
渥美線と戦争は、意

（八軒家の戦争体験者のHkさん）
戦争当時、ぼくは小学生だったかなあ。

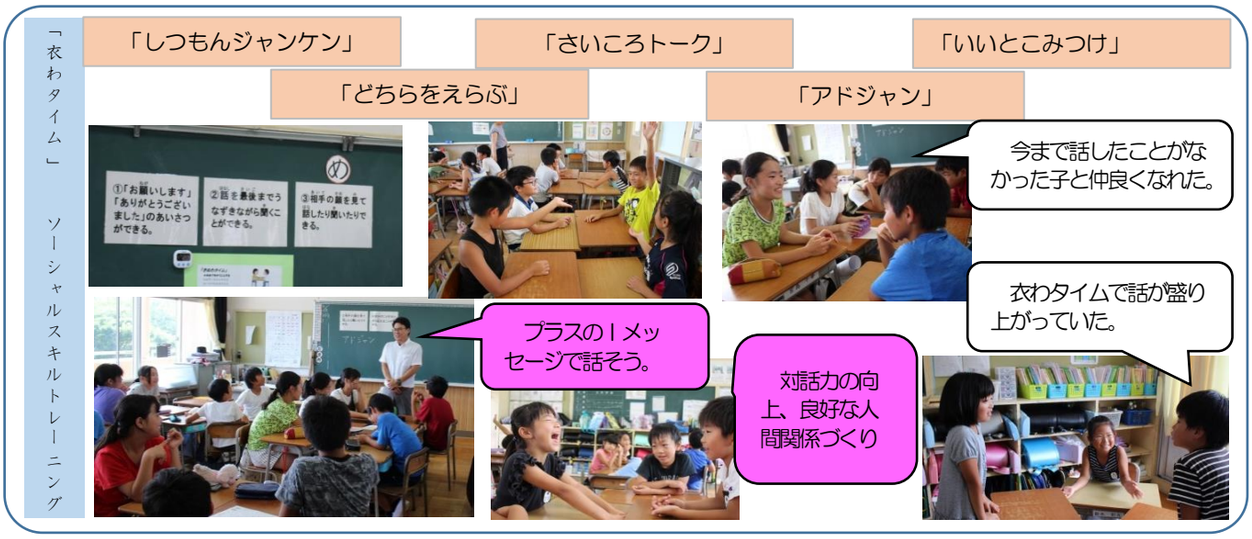
「古代の人々の生活を知ろう」

古代人の生活についてもっと知りたいなあ。

近くに調査している施設はあるかな。

学芸員のSmさんから話を聞くと身近に感じるね。

（市の学芸員さん）
がんばれ！火がつきそうじゃん。



研究の成果と今後の課題

◇成　果

・地域社会にかかわる身近な体験や交流活動は、地域に愛着や誇りをもち、田原大好き、衣笠大好きな子供たちを育てる機会となった。
・地域の教育力を活用することにより、学校と地域双方でプラスの相乗効果をもたらし、子供たちも地域の人たちも元気になった。
・計画を立てる際に、具体的な見通しをもつことができるように対話をすることで、主体的な活動を展開することができた。
・「衣わタイム」を通して子供同士の相互理解が図られ、対話的な授業づくりや学校生活上の諸問題の解決に役立つようになった。

◇課　題

・地域の教育力を生かせる教育課程の編成
・地域の思いと学校の願いの共有
・地域に学ぶ良さの継承